俺と白猫と異世界と

大豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と白猫と異世界と

【Ｎコード】
Ｎ７５８６Ｌ

【作者名】
大豆

【あらすじ】
容姿美麗、成績優秀な刹那には二つの大きな秘密があった。一つは彼が世界でたった一人の魔法使いであること。二つ目は・・・。
彼がとんでもないヘタレである事。
そんな彼が異世界に行って勘違いされたり戦ったりするお話。

第一話　神原刹那について

正直に言おう。俺こと神原（カミハラ）　刹那（セツナ）はこの上無くヘタレな臆病者だ。しかしこうなったのも俺だけの責任ではない・・・と思いたい。昔から人と目が合うと逸らされる。声をかけると相手がどもる。挙句の果てにこちらを見てひそひそと話をする多数の女子。やっべ言ってて泣けてきた・・・。まぁそんなこんなでこの年に・・・１８になってもいまだ人との付き合い方がよく分からない。

そんな俺が何故今喋る白い猫の前で正座して会話などしているのだろうか。止めてくれ人間じゃないからって気を許せる訳じゃないんだ！会話によるコミュニケーションを取れる全生物が怖いんだ！

「・・・とにかく、そういう事だ。異論はないな？」

あ、やっべ全然話聞いてねぇよどうすんだ俺。人間やっぱ愛想よくしなきゃ生きていけないって遠い昔に親父が言ってた気もするしとりあえず頷いとくか？どうする？というか異論はないな？っつってる時点で俺に拒否権ねーよ押しに弱い日本人なんだよ俺は！可愛い猫ちゃんにＮｏとは言えねぇんだよ！そんな訳でとりあえず頷いておく。凛とした白猫はどこかクールに笑ってみせると俺を立たせた。

「行くぞ、新たなる我が主人」

あれ？ペットになるか否かの話だったのか？そんな馬鹿な事を考えた瞬間、俺の体は落ちた。床を引きさいて出来た、真っ黒な空間に。

「・・・っ！？」

「すまないな、乱暴な手で。異世界へ渡るにはこれしかないんだ。」

あぁこんな時すら無口なのか俺は。クールな俺カッコいい。・・・すみません人と喋んの怖くて自然とこうなっただけです。黒い世界を落ちて行く中白い猫だけはやけにハッキリ見えた。

「こんな時にも動じない、か。」

いやめちゃくちゃ動じてるけど魔法がこの世にあるんだから異世界あってもいいかなって思っただけです。なんでこんな事になったんだ？魔法か？俺が魔法使いだからか？

＊

・・・そう。俺は世にも珍しい魔法使いだ。もちろんここは人間関係によるトラブルの絶えない至って普通な世界だ。太陽光で発電したり携帯電話一つで色々出来ちゃったりする超科学的な世界だ。もちろんこんな普通な世界に魔法なんてファンタジックなものはない・・・筈だった。俺という存在さえなければ。おかげでジーチャンバーチャンには化け物扱いされ両親には見捨てられと割と悲惨な過去を送ってきた。正直幼いころの話だからもう吹っ切れたし今は普通（人に避けられている事が普通と呼べるのならだが）に暮らしている。一人で。まぁ俺みたいなやつの過去話はどうだって良い。俺の魔法について話しておこう。

まず火、風、水、土や雷に氷などといった基本的な属性ととさらに闇と光、と言った相反する属性、無属性魔法（浮遊とか）が使える。癒しの術も使えるがこれは・・・修行して身に付けたものだったりする。その上召喚魔法とか使えたりする。まぁ使った事なんて家事を楽にするために家事手伝い呼んだ時くらいなんだが・・・。とり

あえずこの世界において大変貴重である事は自負してる。だからこそ今喋る白猫だとか異世界へ渡るとか変な事に巻き込まれているんだろうが・・・。

正直話の前後なんて緊張してて聞いてねぇよ！

あぁ。どうしてこうなった。

第一話　神原刹那について（後書き）

初めまして皆さん。処女作なのでどこまでいけるか不安ですがお付き合いして下さると嬉しいです。

第二話　異世界到着

真っ黒な世界が終ると気が付いたら森の中に倒れていた。ここはどこだ…。

「起きたか刹那。…そういえば俺の自己紹介もしてなかったな。」

おぉまだいたのかニャンコ。こういうのは連れてくるだけ連れてきて放置がセオリーだろうに。まぁビビり野郎の俺にはありがたいが。

「俺はジークシャン。さっき話した通り神に仕える神獣だ。今は仮の姿としてこんな格好だがお前のサポートが出来る程度には強いから安心してくれ。足手まといにはならない」

いえいえ何の足手纏いになると言うのか…。足手纏いになるのはむしろ俺の方ですごめんなさいニャンコ！そんな気持ちを込めて撫でるとやけにびっくりされた。何故？

「やっぱりお前は色々と人並み外れているな…。というか本当に人間か？」

「…俺は　化け物じゃない」

ここで初めてちゃんとした声を猫に出した。でもその言葉は吹っ切れたとはいえ過去のトラウマだ。出来れば言ってほしくない。くっ…お前なんか喋るニャンコのくせに！

「っ…！すまない！」

シャンは怖々とした声で言った。…何故に怯える！俺か！？俺の顔

はそんなに極悪面なのか！？ななな何だか可哀そうな気もしてきた…。それに動物愛護団体とかに訴えられないよな！？

「怒ってない…。」
「そ、そう…か…。」
「シャン、と呼んでも…？」

あぁくそ！対人（コイツは人じゃないが）用対話スキルなんて持ってねぇよ！言葉が変なトコで途切れるし！どうしようもなくなってシャンを見つめると目をまん丸くしていた。

「シャンって…俺の愛称に、って事か？」

コクリと頷く。（野郎が頷いてもキメェとか言うな！泣くぞ！）シャンは嬉しそうに「構わない！」と言ってくれた。勢いが若干怖いが俺でも打ち解けられる生物がいる事に感動した！シャンは俺の大切なものランキング二位にランクインにした。

「ここは…？」
「…すまない。ここがさっき言った『フィーヴィリーズ』という国だ。ここにはお前と同じ魔法使いも多くいるが…心配しなくていい。」

ファ〇リーズみたいな名前だな、なんて事も思ったがそれ以上に大切な事をシャンは言っていた。俺と同じ魔法使いも多くいる。それはつまり…！

初めての同士の友達づくり可ってことか…！？

今まで誰に話すでもなく考えてきた俺のアレやそれやのオリジナル

魔法について熱く語ったり色々出来るのか…！？その上俺にもちゃんと友達が出来るから心配しなくていいと…！？

シャンの優しさに感動した俺はシャンの小さい体を己の肩にのせて普段滅多に浮かべない笑みを浮かべた。シャンがここまで配慮してくれたんだ。友達１００人…は荷が重いか。とりあえず友達２０人作るぞー！

なんて企み笑いしてる俺をよそにシャンは肩の上でちょっと震えてた。寒いのか？毛皮着こんでるのに。やっぱ猫だからかな。とりあえず服の中に突っ込んでみる。俺の襟元から顔を出す形になり俺さえ見なければすごく可愛い。

「！？　刹那！後ろ！」

後ろ？くるりと振り向いてみるとそこにいたのは…

おっきな森の熊さんでした。

第二話　異世界到着（後書き）

ありがち展開ｗ

第三話　森と熊さん

最初に女神に人間の力を借りるなどと聞いた時にはあまりの事に数十分も呆けていたものだ。当たり前だろう。この事態がどんな神の力を持ってしても難しい事だったから。駄目もとでその男の元に行った時、俺は女神の意図をようやく知った。

あまりにも、美しく。そして恐ろしいオーラを纏う男だった。

白雪のように白い肌と濡烏の髪。どこを見ているのか分からない、黒曜石の瞳。俺を見ているのか見ていないのか。その不気味な人形のように整った容姿が、彼の魔力の強さをより際立てた。神に及ぶような、あまりに巨大で異質な力。今回の事を説明したら俺は殺されるのではないか、などと。神獣である俺が本気で思ってしまった。

「…とにかく、そういう事だ。異論はないな？」

否定だったらもはや打つ手がない、と考えていると、彼は確かに頷いた。胸に満ちた歓喜を押し隠し空間を引き裂く

「行くぞ、新たなる我が主人」

ふわりと空間へ彼を引きずりこむと、彼はわずかに顔を歪め、すぐに無表情へと戻した。さすがだ。もう現状を把握したのか。

「すまないな、乱暴な手で。異世界へ渡るにはこれしかないんだ。」

彼は相変わらず変わらない表情のまま、頷く事もしなかった。魔力の質が変わらなかったことから肯定と受け取る。しかし…

「こんな時にも動じない、か。」

なんというか、末恐ろしい奴だ。いまも十分恐ろしいが。

＊

ある―日♪森の中♪熊さーんに、出会ったー

…生憎俺はお嬢さんじゃないし相手も「お逃げなさい」なんて言ってくれそうな紳士でもなさそうです。むしろヤンキーだよ…。コンビニの前にいるやたら威圧感があって通りにくいあの存在そのものだよ…。まぁ皆俺と顔合わせるとキョドるから怖いと思うのは遠くから見た時だけなんだけど…

「熊…」

「ウルフベアか…チッ、厄介な…！」

ウルフベアって何だよ！狼なのか熊なのかハッキリしろよ！内心そんな風に焦っていても熊は止まらない。至近距離ってわけでもないが捕まったらミンチだ。むしろミートソースになってしまう。あ、駄目だそんなこと言ったらもうミートソース食えなくなる。

「捕まって…シャン」

「捕まるって…！うっわ…！？」

風属性魔法で速力を上げて森を駆ける。いやいやいやいくら魔法使えてもあんなの倒せる訳ないだろ十代の諦めの早さ舐めんな！…いやこの場合年齢ってレベルじゃなく俺が臆病なだけですよねそうですねごめんなさい全国の十代の皆さん！

「刹那！後ろ気をつけろ！」

…？熊に追いつけるような速さで走ってるつもりはないが。臆病者の保身故にこういう逃走スキルは無駄に磨いてきたのだから。と、後ろを向く。

うん。トコトコってレベルじゃねぇ。

四足をついてそれこそ狼のように全速力で駆けている。それこそ森の樹木もなにもお構いなしだ。…やべぇえええええ！！！！！怖い超怖い何コレェエエエエエ！！とにかく逃げなきゃ、なんて思っているとここでまさかの俺ドジっ子スキル発動だ。

コケた。

一応シャンが潰れないように手をついて襟元は守ったがこれ俺死ぬんじゃね？バッドエンドじゃね？何年かぶりかに真面目に死を覚悟した。

……変だな…いつまでも攻撃がこない。ゆっくりと立ち上がる。少し前に出るとそこは崖になっていた。あ、なるほど。俺を追っていた速度のまま突っ込んで落ちたのか。危ねぇぇぇナイスラッキードジ！俺のドジスキル産まれて初めてありがとう！

「…シャン…」
「無事、だが…お前は無事か？」
「あぁ…」

シャンはやけに感動したような目で俺を見ている。何だ？俺の脅威のドジっ子スキルにか？それとも森に入ったと同時にあんな熊に会う俺の運の無さにある意味の感動を感じているのか？…出来れば前者であって下さい頼むから。あぁぁなんか悲しくなってきた。もういいこの事を考えるのは止めよう。

「刹那、向こうから回って下に降りよう。この森からは早く離れた方が良い。」

そりゃそうだこんな熊の出る森危険すぎる。…あー熊といえばジーチャンとバーチャン思い出すなぁ。当時八歳だった俺が一人で熊捕まえて帰って来たの見て腰抜かして俺の事化け物呼ばわりしたんだっけ。…なんだろう。結構悲しい出来事だったのに客観すると結構バカバカしいのは。しょうがないじゃんまさか東京で熊を見るとは思ってなかったんだもん。アー駄目駄目気持ちが切なくなってきた。

「刹那？」
「あぁ…」

出来れば下の村に癒し系の可愛い女の子がいれば良い。

＊

ウルフベア。奴らに挑み命を落としていった者達は決して少なくない。この森の主たるあの魔物を、魔法を使わずあぁもあっさり倒すか！その上さりげなく村のある方向へと走った。まるでこの場所の

地理を知り尽くしているように。そんな魔法でもあるのだろうか。

コレでは神獣の自分の立つ瀬がないのではないかと心配になるほどだった。しかし、そう思っていたのもウルフベアを倒した後の刹那の顔をみるまでだった。

悲しそうな、切なそうな、苦しげな、そんな顔。

あぁ、コイツは。優しいのだ。強すぎる力に似合わず。ならば俺が、コイツを支えてやろう。

「刹那、大丈夫だからな」

「…あぁ」

どうか優しい君が傷付きませんように。ただ、それだけを望んだ。

第三話　森と熊さん（後書き）

これを読めばなんとなく分かるかと思いますが刹那の「家族に見捨てられた」という意識は半分あたりで半分外れです。それも追々…。

＊　で視点を区切っております。

第四話　神子様と死神の誕生

とんたか崖を降りて無事に村につく。やぁ良かった良かったこれでもう怖い思いしなくて済む！

「し、死神だ！」

そんな事もありませんでした。

死神。そんなファンタジーの中でしかいなさそうなその神様の印象というのはヨロシクは無い訳だ。神様であるのはともかく、「死」という言葉がつく時点で恐怖の対象でしかない。まぁつまり何が言いたいかというとだ。

こここここ怖ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！

何この村死神でんの！？つーか死神なんてマジでいたの！？何で俺を見るのまさか振り向いたらいるとかそういうオチか！？そういうオチなのか！？普通ここで振り向く所だが俺みたいなチキンにそんな事求めないでくれ！とりあえず助けて下さいそこの村人Ａ、Ｂ！

「ひぃ！お、俺はまだ死にたくない！」

「助けてくれ！」

そんな事言わないで助けて下さい頼むから！そんな願いをこめ一歩を踏み出すと彼らは逃げてしまった。おいおいおいおいチキンＶＳ

神ってどんな勝負だよ！勝負になんねーよ一発ＫＯだよ！

「…刹那、この村に入るのはお前にとって良くない。…どうする」

え？シャンお前何言ってんの怖い事が起きてるのに人のいないとこ行ってどうすんだよ。アレか？

「こんな所にいられるか！俺は自分の部屋に戻るぜ！」

という死亡フラグをたてたいのか？残念ながら俺は死亡フラグをたてる事なく死ぬモブな訳なんだその辺分かってくれ！

村に向かって歩みを進める。シャンは何も言わずに俺の首筋に頭を擦りつけた。くすぐったくて可愛くて、少しだけ恐怖がやわらいだ。

人っ子一人いない村の中を歩く。くそっ何でこんなに静まりかえってるんだよ怖いだろ！気を張って（ついでに防御壁もはっておく）速足に進む。

「待って！」

「…？」

女の子の声が俺の耳に入った。振り返るとそこにいたのは、妹系美少女だった。長い桃色の髪を後ろで一つに結った、背の低い女の子。その儚い雰囲気は守りたくなるような気持ちになる。どこかで、見たような懐かしい気持ちになった。

「な、何が目的、なんですか？」

「…。」
「な、何か言って下さい！」
すみません俺人と喋るの苦手なんです！シャンは見た目が猫だからまだ良いけど…ってそうだシャンがいるじゃないか！シャン頼むからこの子なんとかしてくれ！そんな目線を送るとシャンは前に進み出た。
「騒がしいぞ小娘。我が主に何用だ。」
「ね、猫…？いえ、この気配…まさか、神獣ですか！？」
「ほぅ…？我の気配に気づくとはな。…その神力…神子か。」
ちょっと待て何で二人でそんな世界を展開させているんですか説明下さい俺に頼むからあとシャンなんかキャラ違くね？公私混合しないタイプなのか？とにかくその子の警戒早く解かせて下さい！
「…その通りです。私はこの村の神子、アサナと言います。」
「アサ、ナ？」
「…主…？どうなさった？」
「いや…」
アサナ、か。昔親しかった女の子（そう、俺にもいるのだそんな子が。）と良く似た名だ。しかし神子さんか。そんな彼女に警戒されてる俺って一体…
「俺に…敵意はない…」
「本当、ですか…？」
「嘘をつく理由が…どこに…？」
彼女は俺を上から下まで用心深く見ると警戒をとくように静かに微

笑んだ。人にそんな風に笑いかけられるのは何年ぶりで…なんか切ない。

「えっと…疑ってしまってごめんなさい。死神様」

あ、それ俺の事だったの？　つーか死神って…どういうことなの…

第四話　神子様と死神の誕生（後書き）

次話は女の子視点です

第五話　神子様の多大なる勘違い（前書き）

アサナ視点です

第五話　神子様の多大なる勘違い

「神子様！死神だ！死神が村に！」

その知らせを聞いて、あたりは騒然としました。死神。この世に不幸をもたらすもの。遠い昔、この国へと訪れた黒い髪に黒い瞳の死神の話は幼い子供すら知っているものでした。死神を滞在させた村や町は原因不明の病と不作に悩まされ、最後にはどの村も町も滅び、今もなおその跡地に行って帰ってくるものは一人もいません。

この国、いいえ。世界には黒い髪と瞳をもつ人間など一人もいません。断言できます。皆が鮮やかな色を持っているのです。そんな中、黒い髪と黒い瞳の若い男。そんな死神にぴったりと当てはまる条件の人間がいるとは思えません。では、

「本当に…死神が…！？」

とにかく皆に家の中にいるように言って、死神が来るのを待ちました。そして、私が見たのは、

美しい、黒髪黒目の男性でした。

それは人形のような、いえ。人形ですらここまで美しくはならないであろうという様な美しさ。神であると言われれば納得してしまうような…あぁ、そう言えばあの方は死神だったのでしたね。死神であっても神とは美しいのですね…。

死神様は私など歯牙にもかけない様子で速足に村を進んでいきます。あぁ、あの方のお声を聞きたい！そんな思いから、自分でも思いが

けない様な大声が出た。

「待って！」

私ったら、死神様に何て失礼な口を！そうは思ったもののもうこうなったら勢いだ、と声をだす。

「な、何が目的なんですか？」

目的、そう。この村に来た目的を私は聞きたい。何故こんな中心都市から離れた村に訪れたのでしょうか。死神様は無言のまま私をジっと見つめました。

「な、何か言って下さい…！」

死神様はそれでも黙ったままでした。私は死神様のご不興を買って死んでしまうのでしょうか…。頭のどこかでそれでも良いと思っている自分を信じられなく思いながら、死神様の返事を待ちました。

「騒がしいぞ小娘。我が主に何用だ。」

その声は死神様の肩から聞こえました。そこに居たのは、神気を纏う猫。すらりとした体躯と穢れなき純白は死神様の漆黒を際立たせていました。

「ね、猫…？いえ、この気配…まさか、神獣ですか！？」

「ほぅ…？我の気配に気づくとはな。…その神力…神子か。」

なんということでしょうか！この死神様は神獣に「主」とすら呼ばれる存在なのです。恐らく、とても位の高いお方なのでしょう。一

体どうすれば…

「…その通りです。私はこの村の神子、アサナと言います。」

「アサ、ナ？」

死神様の口から出たその声は、美しかったです。その言葉が私の名であると認識するのが少し遅れてしまう程に。…何故私はもっとこの方の素晴らしさをお伝えするに最適な言葉を見つけられないのでしょうか！

「俺に…敵意はない…」

「本当、ですか…？」

「嘘をつく理由が…どこに…？」

上から下まで死神様を見る。この森と崖に囲まれた村に来るには不似合いの軽装。ひょっとして何か訳があるのかもしれません。とにかく、先ほどの失礼を謝らなくては…

「えっと…疑ってしまってごめんなさい。死神様」

死神様は、少しだけ戸惑ったような顔をした。…私、何かしたでしょうか。

第五話　神子様の多大なる勘違い（後書き）

物語進んでなくてすみません。でも勘違いｓｉｄｅはちょこちょこ入れて行きます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7586l/

俺と白猫と異世界と

2010年10月10日17時08分発行